

国境を超えて人間への愛を —ゲバラ 革命家の条件—

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

紙幣に肖像が刷り込まれる偉人は少なくない。だがハリウッドで映画になったり、フィギュアになったり、タバコのパッケージにデザインされた人物はいないだろう。彼の顔写真をプリントしたTシャツを着て街を闊歩する若者たちもいた。

20世紀最高のカリスマと呼ばれたチェ・ゲバラ(1928-1967)は軍事独裁政権を倒したキューバ革命の英雄として讃えられ、全世界の抑圧された人々の希望のシンボルになった。その一方で救いがたい理想主義者と揶揄され、誰よりも圧政者に憎まれ、志なかばで悲愴な最後を迎えた。

それでもビートルズのジョン・レノンが「世界で一番かっこいい男」と語ったように彼の伝説は現在も世界のどこかで語り継がれている。ゲバラはまだ暗闇の彼方に消え去っていない。

医学生の放浪の旅と決断

ゲバラはアルゼンチン第三の都市ロサリオで生まれた。本名はエルネスト。父のエドゥアルド、母のセリアとともに名家の出で裕福な家庭だった。未熟児で身体が弱く幼い頃から喘息を患う。

痙攣を伴う発作が起きるたびに酸素吸入器を使って回復する危険な日々がつづく。一家は治療に適した生活環境を求めて何度か転居する。

保守的な慣習に縛られない自由な気風の両親は世界各国のあらゆる書物を息子に買い与えた。本を読んでいるときは喘息の苦しみを忘れること

ができた。ゲーテ、セルバンテス、フロイトなどの著作に惹かれ、母にフランス語を習ってボードレルの詩集などを原書で読む。

アルゼンチン第二の都市コルドバ

の高校に進学し、ラグビーやサッカーに熱中した。プレイ中に発作を起こしても酸素吸入器で復活し、また試合に戻るといふ負けず嫌いだった。

医師をめざして首都のブエノスアイレス大学医学部に合格する。在学中、オートバイ怪力号で年上の友人アルベルト・グラナードと南米一周の旅に出た。旅先で先住民族のインディオ、チリの鉱山労働者、ペルーのハンセン病患者らと出会い、社会の不条理に憤りを覚える。若き日の放浪の旅はのちにスター俳優ロバート・レッドフォードの製作総指揮による『モーターサイクル・ダイアリーズ』として映画化され、反響を呼んだ。

大学卒業後、医師免許を取得したものの、政府による軍医強制徴兵を嫌ってアルゼンチンを去る。たどり着いたグアテマラではCIA＝アメリカ中央情報局と多国籍企業の策謀による軍事クーデターで反米政権が転覆し、メキシコに逃れた。この頃、ペルーの反体制活動家イルダ・ガデアと共鳴して



チェ・ゲバラ

結婚し、娘イルディータが誕生した。

メキシコではバティスタ軍事独裁政権に追われてキューバから亡命した青年弁護士フィデル・カストロらと出会って意気投合する。軍医として反バティスタ闘争に参加することを決断した。

新政府親善大使として広島へ

武力弾圧を常套手段とするバティスタ政権と対抗するためにゲバラは喘息に耐えながらゲリラ戦の訓練に打ち込み、カストロらを驚嘆させた。仲間たちにはスペイン語で「やあ」「ねえ」を意味する「チェ」と頻繁に声をかけていたことから、いつしかチェと呼ばれるようになった。

カストロをリーダーとする革命軍は1956年、中古のレジャーボート・グランマ号でカリブ海へ出航し、7日後キューバに上陸する。しかし政府軍の襲撃を受けて総勢82人のうち12人だけ生き残った。一行はシエラ・マエストラ山脈に潜伏し、徐々に勢力を拡大していく。のちに革命軍の機関紙はグランマ＝おばあちゃんと言われた。

革命軍が支持されたのは偶然ではない。ゲバラは戦闘で負傷した兵士たちを敵・味方の区別なく治療した。カストロも捕虜たちを丁寧に扱うように指示し、国際赤十字に引き渡した。寛大な処置に感激した兵士たちが続々と合流してくる。

戦場での活躍によってゲバラは事実上のナンバー2である少佐に任命された。星形の階級章をつけた黒いベレー帽はキューバ特産の葉巻を喫う姿と共に彼のシンボルマークとなる。

革命の成否は1958年12月下旬、キューバ第二の都市サンタ・クララの攻防で明らかになった。市民の支援のもとゲバラは約300人の精鋭を率いて政府軍約6000人の包囲網を突破する。新年1月1日、バティスタが国外へ逃亡し、カストロと共に首都ハバナへ入城した。キューバ革命の過程でイルダと別れていたゲバラは同志のアレイダ・マルチ・デ・ラ・トーレと再婚し、4児を授かる。

新政府発足後、ゲバラは親善大使として中東・アジア・アフリカなどを歴訪した。日本では藤山愛一郎外相、池田勇人通産相、福田赳夫農相、東龍太郎東京都知事らと会談し、広島平和記念公園を訪れて原爆死没者慰霊碑に献花した。ゲバラは

随行した広島市の職員たちに「アメリカにこんなひどい目に遭わされてあなたたちは怒らないのか」と悲痛な表情で問いかけたという。

帰国後、CIAが仕組んだ傭兵軍の侵攻を撃退し、国立銀行総裁や工業相を務めて医療・教育の無償化、アメリカ系資本の国有化などを進めていく。

世界のどこかで不正を悲しむ

アメリカによる経済封鎖のなかでゲバラは率先して指導者としての規範を示そうとした。休日はサトウキビの刈り入れ、工場でのライン作業、建物のレンガ積みなどのボランティアに精を出す。

対外的には旧ソ連＝ロシアの覇権主義的外交政策を批判して波紋を広げた。超大国による圧力が激化するなかでゲバラは1965年、キューバを離れて国境を超えた革命運動をめざす。カストロに「世界の他の国々が僕のささやかな助力を求めている。もし僕が異国の空のもとで死を迎えても、最後の想いはキューバに向かうだろう。とりわけ君に」とく別れの手紙を送った。

アフリカのコンゴ動乱からラテンアメリカに戻り、新たな革命の拠点としてボリビアを選んだ。だがCIAに訓練された政府軍に捕えられ、イゲラという村の小学校に幽閉された。銃殺を命じられて躊躇する兵士に「恐れるな、撃て！」と告げ、39歳で絶命する。遺体はヘリコプターで近くの街に移され、見せしめとしてさらされた。眼を見開いたゲバラの死に顔が余りにも美しかったために赤いキリストだと胸で十字を切る市民が続出した。死後30年目に遺骨がボリビア空港の滑走路脇で発見され、遺族やカストロが待つハバナに戻された。追悼式典に20万人以上が参列し、サンタ・クララに設けられた霊廟に葬られる。

生前ゲバラは革命家の条件として「馬鹿らしいと思うかもしれないが、真の革命家は偉大なる愛によって導かれる。人間への愛、正義への愛、真実への愛。愛のない真の革命家など想像できない」と語っている。子供たちに宛てた最後の手紙には「世界のどこかで誰かが被っている不正を心の底から深く悲しむことのできる人間になりなさい。それこそが革命家のいちばん美しい資質なのだ」と綴られていた。